書評

中西久枝『イスラムとヴェール：現代イランに生きる女たち』

京都，晃洋書房，1996年

イランでは1979年のイスラム革命後，幼児を除く国内の全女性にヘジャーブが義務付けられている。西欧型近代化路線を採っていたパフラヴィー朝前政権下ではミニスカートの若い女性が街を闊歩していたことを知るイラン・ウォッチャーたちには現在のイランはことさら奇異であろう。

著者は，「ヴェール」の着用がときの政権の政策のシンボルとして機能してきたとし，女性たちのそれらへの「反発・受容」のありようを解説することを通じて革命の前後で彼女たちをめぐる環境がどのように変化したかを探ろうとしている。

これまで，イランを含め中東の女性問題を取り上げた研究はわが国ではきわめて限られており，比較的研究の進んでいる欧米の著書からの翻訳も充分とは言えない。さらに，欧米ではオリエンタリズムとして批判されるような特有の価値観に基づく中東女性像が固定化しており日本の中東女性観もそうした影響を強く受けている，とする著者の指摘にもうなづける部分がある。このような状況下で本書は，イランの女性問題についてのまとまった邦語の研究書として重要な位置を占める。ことに，その資料的制約を考えるとき，きわめて意欲的なテーマを取り上げていると言えよう。

さて本書において著者は，「ヴェール」問題のほかにイランにおける女性運動の歴史，革命政権の女性政策の思想的側面，婚姻・教育など現在の生活環境を論じ，さらに数人のイラン女性を対象にした聞き取りの記録などをまじえ，その実態に迫ろうと試みる。また革命以後継続して活動を続ける女性組織の機関誌をもとに，現代イラン女性の「女性観」をも論じている。

こうしたきわめて多面的なアプローチが，本書の主題に広がりを与えている。ここでは，これまでわが国ではほとんど知られることのなかったイランの女性組織やその活動，あるいは女性の諸権利関連の法制度についてなど，まとまったかたちで貴重な情報が得られる。

しかしながら一方で，欧米から輸入された固定的中東女性像に対するアンチ・テーゼとしてイラン女性の生々しい実像の描写を期待する読者にとっては，やや物足りなく感じられる点にも触れなければならない。それは，著者がイランの女性問題を，彼女たち自身の問題意識から離れて現体制下における(とくに男性側の)性意識の問題に矮小化してしまっているように思われる点である。

著者はかなりのページ数を割いて，イスラム革命後，婚姻などを含むさまざまな「差別的」立法によってイラン女性が多くの権利を剝脱されてきた，と論じる一方で，革命後の女性議員の活躍や就労を通じた社会進出については女性の隔離に失敗した政府の政策矛盾であるとの見解を示している。ここで女性は権利を「奪われる」もしくは「与えられる」存在として描かれるが，革命政府の政策と彼女たちの自律的な運動との関連や，革命後の政策を彼女たち自身がどう受けとめているのかについては具体的に記されていない。

また前述したように，著者はイラン人のもと「女性運動」活動家へのインタビューや，イランにおける女性組織の歴史的追跡など，たいへん貴重な調査を行なっている。しかし本書では，彼女たちの所属したグループの政治的色分けや組織史などは詳述されているものの，そこからはこれまでのイランにおいて，イラン女性によって主体的に自覚された具体的な「女性運動の争点」「獲得目標」が何であったのかが判然としない。

結果として，イラン女性の価値観のありかた，それに基づく女性問題の所在が，読者にはいまひとつ不明瞭なまま「イランの女性差別」に対する査定が行なわれ，それらがあたかもイランにおける主として男性側の，あるいは革命政府の「後れた」性意識によるものであるかのような印象を与えているのが残念である。

また本書の主題である「ヴェール」の問題もかかるイラン女性の価値観のありかたと密接に関連している。イランではときの政府の政策とは無関係に自発的にそれをまとう女性もまた珍しい存在ではない。著者は，イランにおいてイスラム革命後政府から強制されたものに対して特に「ヘジャブ」という用語を用い，その他には「ヴェール」を用いるとして（著者は，本来イスラム以前から存在していた地域的慣習のひとつである女性の被りもの・ヴェールが，時代とともにそのイスラム的色彩を強め，現在のイランのようにイスラム法の適用と不可分の政治的問題にまで発展してきたとする），二者を使い分けている。この用語使用は，イランにおける「ヘジャブ」が先の革命によって忽然と出現したかのような印象を与えるが，実際にはそのはるか以前からイラン女性たちの間で「ヘジャブ」がイスラムの脈絡で有意であったことは言うまでもない。その意味で，イスラム革命政府が強制するものを「ヘジャブ」とし，そうでないものを「ヴェール」とするという著者の区分けは，「ヘジャブ」の歴史的実態から離れ現在イランでヘジャーブが義務化されていることの意味をいささか単純化してしまっているように思われる。

こうしたいくつかの点は，「ヴェール」を中東女性の後進性の象徴とする欧米の固定観念を批判的に検証しようとする著者の意図が，やや未消化に終わってしまっているように感じさせる部分である。イラン女性のものの考え方や要求・実態などの具体的な紹介により多くのページが割かれたなら，読者にとっては一層有益かつ分かりやすいものとなったであろう。近い将来，本書に記された多くの貴重な調査記録・資料などをさらに発展させ，新たに著者の意欲的研究が著わされるのを待ちたい。

（岩﨑葉子／いわさき　ようこ／総合研究部中東総合研究プロジェクト・チーム）